

別記様式第1号（第4条関係）

木津川市立小学校及び中学校の在り方検討委員会 開催結果の要旨

会議名	第1回 木津川市立小学校及び中学校の在り方検討委員会		
日時	令和3年8月20日（金） 午後2時～4時	場所	木津川市役所5階 「全員協議会室」
出席者	委員	■榊原 禎宏（委員長）      ■岡田 敏（副委員長） ■中川 嗣郎      ■島本 秀美      ■山下 智義 ■的場 千里      ■林 真衣      ■和田 妙子 ■武田 博信      ■行衛 満      ■坂寄 正男 ■福本 桂子      ■高井 啓介      ■渡部 基信 ※□：欠席者	
	その他出席者		
	事務局	竹本部長、遠藤理事、大村理事、木下課長、西村主幹、 山口主幹兼総括指導主事、齋藤担当係長、寺内主事 オブザーバー：学校教育指導主事	
議題	1. 開会 2. 教育長挨拶 3. 委員紹介 4. 委員長及び副委員長の選出 5. 委員長挨拶 6. 諮問（資料1） 7. 議事 （1）報告事項 ① 委員会について（資料2、別紙1・2） ② 小・中学校をめぐる状況について（資料3-1・3-2・4） ③ 市が目指す教育の方向性（資料5） （2）協議事項 8. その他 9. 閉会		
審議結果要旨	1. 開会 事務局より、開会を宣言した。 2. 教育長挨拶 森永教育長より、開会にあたり挨拶があった。 3. 委員紹介 委嘱状を交付し委員名簿により委員紹介を行った。		

	<p>4. 委員長及び副委員長の選出 委員長として榊原委員を、副委員長として岡田委員を選出した。</p> <p>5. 委員長挨拶 榊原委員長より、選出にあたり挨拶があった。</p> <p>6. 諮問（資料1） 森永教育長より、木津川市立小学校及び中学校の在り方検討委員会に対し諮問があった。</p> <p>7. 議事 （1）報告事項 ① 委員会について 「資料2」「別紙1・2」を用いて、木津川市立小学校及び中学校の在り方検討委員会の設置目的・概要について説明し、中長期的な展望に立って今後の市立小中学校の在り方について、2か年かけて審議し、令和4年度の答申を目指すことを確認した。 また今後のスケジュールの他、基本計画の内容として、学校の現状と児童生徒数の推移・推計、学校規模ごとの教育活動におけるメリット、デメリット、学校施設の状況などから将来の学校運営の様々な方向性を考えて基本計画を策定し、そのうえで中学校区を基本とした実施計画に繋げていくことについて説明を行った。</p> <p>② 小・中学校をめぐる状況について 「資料3-1・3-2・4」を用いて、城山台小学校・木津中学校・木津南中学校以外は全ての小・中学校が減少見込みとなっていること、令和3年と9年の減少が最も大きいのは、城山台と同じように学研都市開発によりできた新興住宅地の梅美台にある梅美台小学校であること等、市立小中学校 児童生徒数・学級数の状況について説明を行った。</p> <p>③ 市が目指す教育の方向性 「資料5」を用いて、木津川市が取り組んできた教育の重点を踏まえ、また新学習指導要領等の国の教育の動向を鑑み、これからの学校は単に教科等、知識や技能を習得させるだけでなく、児童生徒同士が集団のなかで多様な考えに触れ、認め合い協力し合い切磋琢磨することを通じて、思考力や表現力、判断力や問題解決力を育み、社会性や規範意識を身に付けさせることが一層重要となるなど、木津川市が目指す教育の方向性について説明を行った。</p> <p>（2）協議事項</p>
--	--

	<p>今後の協議に向け、小・中学校の在り方全般について意見交換を行った。</p> <p>8. その他        次回の委員会は、10月15日に開催することとし、事務局より後日、通知することとした。</p> <p>9. 閉会</p>
--	---

## 会議経過要旨

### 1. 開会

- ・本日の会議は公開とし、会議録作成のため録音することの了承を得た。
- ・委嘱書は、委員机上配布をもって交付とした。

### 2. 教育長挨拶

新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言下であるが、対策に万全を期して会議運営を行っていくのでよろしくお願ひしたい。

検討委員会を設置した目的は、子どもたちを待ち受ける社会は企業活動や日常生活が大きく変容していく社会であり、一方で地球規模での気候変動、感染症など、予測困難な社会である。そんな中で、子どもたちが自立して豊かな生活を過ごしていくためには9年間の義務教育を通して、一人ひとりの良さや可能性を伸ばすとともに、多様性を認め合い協働しながら、主体的に課題を解決する探究心を育成していくことが大切である。木津川市としては、そのような教育を進めるための最も望ましい教育推進体制を図ることが大変重要な課題と考えている。

木津川市の学校の状況は、人口が急増している城山台地域を除く地域で、児童生徒数が全体的に減少しており、今後も減少していくことが予想される。また多くの学校で老朽化が進行しており、時代に即応した安全環境整備も必要である。

そのような状況を踏まえ、現在は現下の重要な課題である城山台小学校の児童急増対策について、さまざまな施策を講じているところであるが、その他の減少地域の小中学校についても長期的な視点に立って、9年間を見通した学校体制の在り方、児童生徒の多様性が活かされる学校の集団性、地域社会との連携、計画的な学校施設設備の整備など、子ども達に望ましい教育を進めていくための環境整備を図っていくことが大変大切な課題と考える。

委員の皆様方には、未来の子ども達の視点に立った望ましい木津川市の小中学校の在り方について、議論いただき様々な視点からの提言をいただくようお願い申し上げます。

### 3. 委員紹介

審議結果要旨のとおり。

### 4. 委員長及び副委員長の選出

委員長には、木津川市いじめ等防止対策委員会の委員長として木津川市の教育に携わって来られた実績を評価する委員からの推薦により、榊原委員を選出。

副委員長には、長きにわたり児童生徒の健全育成に取り組んでこられた実績を評価する委員か

ら推薦により、岡田委員を選出。

#### 5. 委員長挨拶

教育の改善・改革はいつの時代もテーマになるもの。この度は、コロナ禍ということもあるが、DX（デジタルトランスフォーメーション）、デジタル化による社会変革、また人口動態による急激な変化、これは、明治から初めてのことになると思う。日本の小学校も2万5千校ぐらいを維持してきたが今1万9千校ぐらいになっている。子どもの数が減って、かつてのように親が通っていた学校に子どもが通うということが前提にできないような大きな変化と、デジタル化という急激な変化の両方向から考えていく時期かと思う。

人が減っていくということもあるが、まだ見えない未来を少しイメージしながら、どうやっていけば良くなるのかというアイデアを出しやすい時期かとも考える。忌憚なく色々な意見を出していただきたい。

#### 6. 諮問

審議結果要旨のとおり。

#### 7. 議事

主な意見・質疑等は次のとおり。

会議録署名委員について、名簿順により中川委員を指名した。

##### (1) 報告事項

##### ① 委員会について

会議結果要旨のとおり。

##### ② 小・中学校をめぐる状況について

会議結果要旨のとおり。

委員：資料3の1校区のことについて、木津南中学校の校区に梅美台と州見台と、城山台も入るのか。

事務局：城山台は現在木津中学校に通っているが、令和5年以降9丁目から13丁目が木津南中学校区となる。

##### ③ 市が目指す教育の方向性

会議結果要旨のとおり。

##### (2) 協議事項

委員長：報告事項の資料で、児童生徒数の資料から、今後6年間に大きな減少が見られ、クラス替えが出来なくなる可能性がある。人との関わりを深めていくのはどうなのかということもある。一方、小さい学校の方が深く関われる、大人数では存在感が弱くなってしまふなどの見方もある。これまでからも論点になっている所であるが、二択ではないがそれぞれ

の良さはどう考えられるか。

委員：我が子が通学している小学校では、1学年2クラスで毎年クラス替えがあるが、みんなの仲が良いので、少ない方がいいのではないかと思う。

委員：1学年2クラスでクラスの人数は約20人、先生の目が行き届く範囲である。体調が悪いとか、理解度を全体を把握するには、大きいよりは1クラス30～40人程度で、クラスも多過ぎない方が、先生にも児童にもいいと思う。

委員：人数が多い学校では、目が届かないように思う。算数とか人数が多いと個々の状況のすくい上げが難しいときがあるのかなと思う。学校も理解度でクラスを分けたり工夫をしてくれているものの、人数が多いことは変わらないので、小規模校の方がいいのではと思う。運動会も人が多くて見にくいという保護者からの意見もある。小規模校の方が先生との距離も近くなるのではないか。

委員：2クラス程度の学校がいいのかなと感じるところはあるが、教師は、赴任先の学校でそれぞれの学校規模に応じた学校経営を行っていくのが任務で、大規模校・小規模校それぞれに応じたよりよい運営をとるという視点で取り組んでいる。一概にどちらがどうかというのは難しい。それぞれの良さを感じながら勤めている。

委員長：人と関わる力の形成も大切であるし、新型コロナウイルスという未曾有の出来事の中で、いろんな人と出会っていくことが重要という視点ではどう思われるか。

委員：規模の大小に関わらず、それぞれの良さがあると感じる。大きい学校の子どもたちは、友達の関係性の広がりを感じる。両極の答えではなく、小さい時の環境が人間関係の作り方に影響、良さがあるのではと考える。

テレビ番組で取り上げられている人数の多い兄弟姉妹の家庭の様子では、子どもたちが朗らかで逞しく自立心が高いと感じることもあった。人間関係の作り方に影響するのではないかと考える。一方で、規模の小さいところは、信頼関係や絆は特別なものがある。

委員長：中学校の部活動などでは、ある程度人数がいた方がいいのではと思うが中学校ではどうか。

委員：全学年3クラス規模の学校だと多くのクラブを作れない、例えば野球部に人が集まればサッカー一部が成り立たない、というような状況である。

最近は、学校外でのクラブ活動に参加する生徒もあり、部活動の存続が課題となり、また小学校でやってきた種目をクラブとして作れないかという生徒からの要望の声もある。これらをどう兼ね合い進めていくかというのが毎年の課題である。

木津川市では、他校のクラブに参加もできる制度もあるが、毎日の部活動については、

小さい学校は制約を受けているのが現状である。大きい学校では色々な選択肢がある、子どもたちのニーズを考えるとより良いのでは思う。一長一短はあると考える。

委員：この先9年間を見通していくと、児童数が減る状況では統廃合されるのではと懸念する。どの学校も減少傾向であり、いずれ城山台小学校でも下がってくる。

統廃合により通っている児童が別の学校に行かなければならない、というよりは、児童数が減るのであれば学級数を減らし、30人クラスが15人クラスになった方が、目配りができるのではと思う。

校舎も老朽化してくる中で統廃合されるのではという気がしてならない。少しでも長く学校を維持してほしい。

委員長：学校と地域社会の歴史の中で築かれてきた関係もある。

委員：当尾地域でも小学校の統廃合が10年前にあった。極端に少なくなったのでやむを得なかったと思うが、この検討委員会ではどんな基準で統廃合を考えていくのかを知りたい。

教育長：望ましい規模というのは当然考えていく必要があるが、今ここで事務局の意見をお示しするということではなく、この検討委員会で様々な意見を出していただきたい。

国の指針があるが、画一的に適用するつもりはない。この委員会では幅広い議論をお願いしたい。

委員：小・中学校の規模は、どういう子どもを育てたいかというのがあって、そのためには、どういう規模、体制が必要かを考えるべきではないかと思う。

相楽台小学校で評議委員をしてきたなかで、これまでの校長に学校活動の中でどれくらいのクラスが適正かを聞いたところ、大体1クラス30人程度、できれば1学年3クラスが望ましいという意見があった。今の相楽台小学校では3クラスにならない。どういう子どもを育てたいかということのをベースに考えていきたい。

小中一貫校は良い所があるのか知りたい。

委員長：小中連携や小中一貫校については、次回以降での議論になってくると考える。学校規模、クラス規模など、いろいろな面から9年間を見通したと学校運営というものも議論の重要なポイントになってくる。

学校全体のサイズ、クラス人数、また個々の活動におけるサイズ感もありえると思う。

委員：この10年、小中高のPTA活動に携わってきた。

学校のクラスの適正人数は、この検討委員会で探っていくところであると思う。学級数や部活動もあるが、文化祭・体育祭などの学校行事においても適正な児童生徒数、理想的な数があると思う。

木津川市は地形に良い形をしており、山間部もあり、市の中心を木津川が流れている。

統廃合をにらんだ学校の在り方というのは避けて通れないと考える。木津川市にふさわしい形を検討していくべきと考える。コストとの両面から考えていくのが一番であろうと思う。

メリットデメリットを事務局に抽出してもらい話あって進めていけばいいのではないか。統廃合すると学校名がなくなるので、分校という形がとれないかと思う。行事は本校でやって、授業は分校というように、どうしたらできるか考えたい。

委員長：大学もそのような運営形態をしているところもある。

委員：新興住宅地の学校は児童生徒数・クラス数が多いと思っていたが、今回の資料で減少になることに驚いた。近い将来、統廃合も視野に入れたいといけないのではと感じている。良い点も悪い点もあると思う。数年後の変革期を心配する。

少人数は自分の経験からも、目が行き届くなどいい所を知っているが、大規模校で学んだ経験が無いので分からない部分もある。

学校での耐震工事は終わっているのか。

事務局：市内18校 すべて耐震工事は完了している。

委員長：子どもの発達や成長という観点で考えた場合はどうか。

委員：赤ちゃん学の研究と併せて医師の立場から、睡眠障害の中には不登校の相談もある。小さい学校では人間関係から崩れることが多く、クラス替えがないのも一つの要因と思われる。

学校の先生も様々な状況への対応をされおり、放課後登校、別室登校の対応などもされている。学校の先生から見た適正規模がどういうものか興味ある。

事務が多くて、本来の子どもの相手ができないとか、教師離れの原因になっているという現状も聞く。先生が責任もって見れる人数ということも考えることが必要ではないかと思う。

委員長：教職員の働き方についても言及があったが、どう環境を整えるのかという観点も、子ども第一とした上で考えていくことが必要と感じた。

小中一貫、小中連携について意見をいただければと思う。例えば中学校の先生が小学校へ教えていくことで、中学校へなじみやすいとか、小中の交流など、これまでもあったが、積極的に進めている自治体もある。

物理的な距離は考慮する必要があるが、小・中の望ましい関係の在り方、小中一貫等への考えはあるか。

委員：前職が現中学校区の小学校での勤務であった。生徒の3分の1が前小学校の卒業生で、保護者の顔も知った顔が見られる。また中学校から校区内の小学校へ行った先生もあり、

中学校区の3つの学校間の連携は取りやすい状況にある。こんなケースは稀かもしれないが、状況の把握や交流がしやすい。

合同の研修機会もあるが、日常的に教職員間で交流する関係が大切で、9年間同じ子どもたちを育てていくなかで、どう時間を作って連携していくことが大切かと考えている。

委員長：市全体の13小学校5中学校をみたとき、小中一貫を考える際に、難しいところなど気づくことはあるか。

委員：5中学校それぞれ工夫した取り組みを行っている。見守り・安心安全の取り組みであったり、児童生徒会の交流であったり、それぞれが状況や規模に応じながら小中連携を進めてきている。

委員長：幼小中のつながりや接続についてどうか。

小中と連続はしているがそれぞれの教育活動があり、ギャップはあってもいいという考えと、ギャップが大きいとスムーズな移行に繋がらないということ、どちらが正解ということではないが、どのように思われるか。

委員：大規模校では小学校でも1年毎にリセットされており、中学校へ進学するときも、友達ががらりと変わることに慣れているような感じがする。

小・中の連携はいいと思うが、小規模での連携はいいが、大規模校では、顔見知りというのは難しいので、意味はあってもメリットがあるのかは分からない。

委員：子どもの変化はまだ分からないが、小学校で顔を知った先生が中学校にいると安心感はある。人的につながりがあるのは安心。

委員：中学校は他の小学校区域からも一緒になり多人数となる。通学距離も大変だと思う。生徒の挨拶が少ないかなと思うが、警戒しているのかなとも感じる。

小さい小学校からだと友達はあるが、大きな学校への進学は不安である。親同士が分からないのも要因と思う。

委員長：小・中学校の先生同士での交流はどういう雰囲気か。学校担任をベースにする段階と、教科担任がベースになる段階で違うと思うが。

委員：小・中学校の先生の関係はいいと思っている。これまで体験入学とかをやってきたが、残念ながら、新型コロナの影響で昨年からは出来ていない。今年も、先生の合同研修も予定していたがこれも出来ていない。これまでと同じような関係性を続ける難しさはある。しかし、垣根は高くない。

委員長：自治体によって距離が近いのに関係性が薄いなど、小中学校の関係は様々であるが、木



津川市全体の小中学校として捉えていると考えられていると理解した。

委員：自分の経験からいうと、小学校から中学校への進学、他地域の小学校の児童も同じになり、それぞれクラスが分かれる。その中で、違う人と会うのは不安でもあり好奇心もある。他の小学校卒業者には負けられないという気持ちもあった。いい面で頑張った。

複数の小学校から集まって、ひとつの中学校に行くというのは、それで一貫校になっているのではないかと思う。

委員長：報告内容の中にデジタル化という話題提供があった。小中学生にとって適時性もあるがどういう所が良いか。一方、直接的な実体験も大事であり、デジタルとの付き合い方はポイントになる。子どもの発達、世界認識などという面からも、どういう形が望ましいと考えられるか。

委員：アメリカの小児科学会の報告によると、あまり小さい時から与えることは良くないとされている。子どもをあやすのにスマートフォン等を使い、それが無いとあやせなくなるような状況は危険、スマホを見ていると寝る時間も遅くなる。中学生ぐらいになると、男子はゲーム、女子はラインでのやりとりの中で、締め切る方法が分からなくなってくる。何時になれば終了といったルールを学校単位で決める必要がある。家庭だけでは無理な状況にある。

デジタルも大事だが、体験型とか自然に親しむなど、いろんな楽しみのひとつとしてデジタルがあればいいが、それありきで他のものでは楽しめないという状態は問題がある。国のデジタル化の推奨も良いこととは思うが、子どもはそれ以外のものでも楽しめる環境が大切。

保育園幼稚園時代は他のものでも楽しめるが、小学校高学年から中高校生になるとスマホを触っている時間が上がる傾向にある。

ルールを決めて中毒にならないように、使われるのではなく、意思でコントロールできる教育が大切である。

委員長：子どもたちも地域社会で生活することになるが、子どもたちがいろいろな体験ができる地域の在り方、学校と地域の連携、今の状況またこれからの発展についてどう思うか。

委員：授業の内容によっては、単に話を聞いているだけでなく、デジタルのものを個々に与えられることによって、直接個別指導とかに役立つと聞いており、使い方によって効果のあるものになると聞いたことがある。

スマホ等の扱いについては、家庭できちんとルールを決めているところ、親がゲーム等をやり続けて子どもに注意出来ない家庭もあり、時間を決めるなど家庭でのルールが必要と考える。

委員長：パソコンの使用が、近視の子どもが多いとかの要因になっているようなことはあるのか。

委員：それもあると考える。近くで光を浴び続けることによって、体内時計が狂うなどの課題がある。画面が興奮する材料であることと併せて、光をあびることで頭の中が昼間だと思ってしまう、寝るのが遅くなる。一つの学校へ行きにくい要因になり得る。

機器はリビングルームにおいて、子ども部屋に持っていかない、親も同じように守る必要がある。生活リズムを作ることが大切。

学校毎で利用制限について強くメッセージを出していくことが必要ではないか。

委員長：学校でのGIGAスクールや、ICT活用状況はどうなっているのか。

委員：木津川市ではデジタルドリルの導入が決まり、個別最適化に向けた学習の進展につながると思っている。

タブレットについては、各家庭に持ち帰り、家庭と学校を試験的に繋ぐ取り組みを各学校で行っている。その上で、今はインターネット環境の改善に向けて進んでいる。2学期からより一層良い使い方が可能になると考えている。

若い先生方が先導し、全教職員が学校全体で前向きに取り組んでいる。

また、別室で授業を受けている児童と教室をオンラインでつないで、一緒に画面を通して時間を共有する使い方が出来た。今後も使い方次第でいろいろな工夫ができると思う。

委員：デジタル化、多様性など、子どもたちが育っていく中で、これからどういう教育がいいのか、こうしてほしいと思うことを本の紹介も含め話したい。

1点目がインターネットとの関わりのなかで、いろいろな人と繋がることで、子どもたちにいろいろな危険性がある。性的な問題とかは、学校で早いうちから教えてほしい。小さい子どもでも分かる伝え方とかが、日本は遅れていると思う。人間が生まれてきたこと、親は子どもを大切に思っているから知ってほしいことなどわかりやすく書かれている。自分で自分を守れる子どもになってほしい。

2点目が、グローバル化の中での英語について。子どもが成長して語彙が増えていく段階を踏まえながらトレーニングをしていくもの。英語のテストだけでなく、相手や自分のことを英語で表現できるように、コミュニケーションがとれるようになってほしい。

3点目、中学生くらいから美術が嫌いになる傾向がある。答えがあるところを目指す採点をするという教育から、美術思考という、より表現を探究したかというアウトプットが大事で、見たことに対して自分の考えを出す、答えを出せるようになってほしい。

受験に関係ないことは重要視されていない所がある。多様性を受け止め、生きていく力を育てることが大切と思う。

委員長：国の報告でも、STEAM教育や科学技術だけでなく、アート思考の感性を養わないと難しいのではないかといったことが、言われている。

子どもたちの時間の使い方が、デジタル化、例えばAIドリルの活用により省かれた時間を、共同体験や他の調べ事などに使うというような、再構成させる可能性がある。そう

いった中で、学校間でどんな繋がり方をしたり、どう具体化していくのかというのを次回以降進めていきたい。

#### 8. その他

##### ① 次回の進め方・日程について

今回は、義務教育9年間を見通した望ましい学校の在り方について、思い描かれる学校像などを、グループディスカッションの方法で意見を出していただき、今後予定している保護者・教職員アンケートや、これからの協議内容にも反映していきたい事を提案した。

日程は10月15日金曜日の開催とする。

#### その他特記事項

傍聴者6人、報道関係者2人